

# 民国期末 (1947-1948) の中国の社会学の現状と将来についての社会学者の意見

星 明

## 〔抄 録〕

この資料紹介は、民国期の代表的社会学者の龍冠海、孫本文、朱約庵・呉百思・毛起鷄・陳定閔の当時の中国の社会学の現状と将来についての意見の紹介と解説である。

アヘン戦争に端を発する西洋列強の武力による主権の侵害、太平天国を典型とする異民族の反乱といった内憂外患の歴史的背景のもとで中国は社会学を受容したし、1931年9月柳条湖事変の勃発から1945年8月までの15年戦争、とりわけ1937年7月の盧溝橋事件をきっかけにした日中戦争では大学の社会学部、学会活動、研究活動が大きく破壊されたし、また1946年から1950年に至る国共内戦も社会学の教育研究活動、学会活動を大きく制限した。

そのようななかで、1940年代半ばから、ここで取りあげたような中国の社会学の存在意義、対社会的役割の議論がはじまってきた。そこでは、近い将来共産党政権が成立し、その政権によって社会学が廃止されることは意識的にか、あるいは無意識的にか、まったく触れることなく社会学者の社会学に対する展望が語られている<sup>(1)</sup>。

キーワード：中国社会学、民国期、龍冠海、孫本文、毛起鷄

## はじめに

中国の社会学の歴史は、2018年の今日に至るまでに、すでに約130年に達する。清朝末期にアヘン戦争の敗北に端を発する内憂外患で国家存亡の危機にあった時に、国家存続のための一つの理論的支柱として社会進化論が、そのなかでハーバード・スペンサーの進化論的社会学が厳復によって中国に紹介された。

導入から今日まで中国の社会学の歴史は文字通り紆余曲折を経た。とりわけ、清末から民国末までの約50年間続いた社会学が新中国建国以後の約30年にわたって取り消されたことおよびその後の1979年の回復と再建である。このようなことはわれわれ日本では経験がない。

中国の社会学の発展の時代区分は学者によってさまざまであって、一致はない<sup>(2)</sup>。筆者は本

稿の目的のために暫定的に民国期の社会学と新中国期の社会学とに区分する。その理由は、1) 民国と新中国とは国家の体制が資本主義から社会主義へ変わったこと、2) したがって、社会学もブルジョア社会学からマルクス社会学へ変わったことである（しかし、1949年から1978年まではおよそ社会学と名の付くものは徐々に調整、廃止を経て、タブーとされた）。まさに、中国で社会学が取り消される1,2年前の社会学の現状と将来についての社会学者の論説をみた。

本稿では、うへの区分の民国期の社会学、とりわけ民国期末の『社会学訊』と『中国社会学訊』の二つの社会学会便り（通信）から数編の記事を紹介する。

## 1. 『社会学訊』と『中国社会学訊』の発行の背景

うへの学会便りが発行された背景には、日中戦争によって中国の大学、社会学者が地方に散らばったことが影響している。闡明は自著のなかでその詳細な状況を次のように具体的に紹介している。「1937年から1945年の抗日戦争は、中国社会および中国社会学のいずれに対しても、極めて厳しい試練であった。高等教育においては、戦前大部分の大学はいくつかの大都市に集中していた。戦争勃発以後、これらの都市およびそのなかに位置する大学は、日本軍の爆撃あるいは占領によく遭遇した。たとえば、滬江大学は1937年8月14日、15日の両日、敵軍の砲撃にあい、すべてが破壊され、壊れた家と倒れた塀だけが残り、所蔵の図書、器械はすべてもちだしていなかった。戦争が破壊したのは家屋や設備にとどまらず、学者についていえば、さらに大きな損失は長年心血を注ぎ、成し遂げた教学研究資料である。燕京大学の社会学教授呉文藻は出版できる10箱の講義の原本を失った。清華大学教授陳達は1923年の帰国から抗戦がはじまるまで、10数年間、2万余りの新聞の切り抜いた材料を蒐集したが、敵機の爆撃で焼かれ、全部灰燼に帰した。学校運営を継続するため、いくつかの広東にある大学は暫定的に香港に移ったが、大多数の大学は次々と後方の四川、雲南、貴州などの省に転々と引っ越し、国内外の教育史上、まれにみる文化的大移動をなした。国立西南連合大学を例にすると、1937年夏、日本軍は北平を占領し、天津に進攻し、飛行機の爆撃で、南開大学の校舎は全壊した。北京大学、清華大学、南開大学は南部への移転を迫られ、まず長沙で「臨時大学」を組織してから、また1938年2月に昆明への移転を決定した。この移転は二つの団に分かれた。一団は244名の教授と学生からなる湖南省、貴州省、雲南省行程団で、長沙から湖南省西部を経て貴州省を抜け、いくつもの山を越え、早朝出発して夜宿に着き、行程3500里余り、68日を費やし、昆明に着いた。陳達も歩行の隊列にいた。別の一団約800人は、長沙から列車に乗り、広漢、広九鉄道を経て、香港に着き、さらに船に乗り、海防に着き、海防から列車に乗り、滇越鉄道を経て、昆明に着いた。全行程は約10日であった。1938年4月、臨時大学は国立西南連合大学と改名した」<sup>(3)</sup>と。

『社会学訊』創刊号（1946年5月20日）の編集後記には「抗戦中、同人は各地に分散し、

音信が乏しくなった。現在、分社(中国社会学社広東分社のこと)は国内外の社会学界と、相互に情報を交換するという見地から、特別号『社会学訊』ではもっぱら短編の論文、国内外の社会学研究の概況、社会学界の消息および分社の活動を掲載する。毎月一回の出版とする」と記されている。

ここからもわれわれは、日中戦争および当時も続いていた国共内戦の社会学界に及ぼした深刻な影響をみてとることができる。通信は散り散りばらばらになった大学や社会学者間の研究交流と研究発表の役割を果たしていたのである。

紹介する論攷は当時の中国社会学の前途、展望、今後、未来を論じているもの8編のなかから、次の三つを選んだ。

- (1) 龍冠海, 1947, 「中国研究社会学者的出路問題」(中国を研究する社会学者の前途問題), 『社会学訊』, 第4期, 中国社会学社広東分社、
- (2) 孫本文, 1947, 「中国社会学者今後努力方向之商榷」(中国社会学者の今後の努力方向についての議論), 『中国社会学訊』, 第5期, 中国社会学社、
- (3) 朱約庵ほか, 1948, 「中国社会学の過去と未来」(中国社会学の過去と未来), 『中国社会学訊』, 第8期, 中国社会学社、である。

因みに、ここでは紹介できなかったのは次の5編である(カッコ内は筆者による未選択の理由である)。

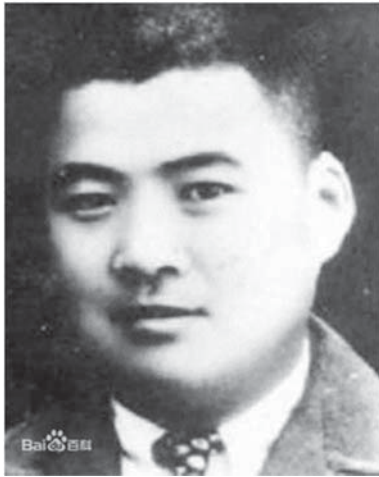
- 1) 柯象峯, 1947, 「社会学研究之展望」, 『中国社会学訊』, 創刊号, 中国社会学社……(印刷文字不鮮明で判読困難なため)、
- 2) 孫本文, 1947, 「二十年来中国社会学界の一貫精神」, 『中国社会学訊』, 創刊号, 中国社会学社……(うへの(2)と記述に重複があるため)、
- 3) 陳定閔, 1947, 「一年来社会学著作簡述」, 『中国社会学訊』, 創刊号, 中国社会学社……(1946, 1947年に記述が限定されているため)、
- 4) 柯象峯, 1947, 「我对今後中国社会学社之希望」, 『中国社会学訊』, 第3期, 中国社会学社……(学術団体としての活動の記述に限定されているため)、
- 5) 言心哲, 1947, 「中国社会学社的責任和前途」, 『中国社会学訊』, 第5期, 中国社会学社……(学術団体としての活動の記述に限定されているため)、である。

## 2. 龍冠海、1947、「中国研究社会学者的出路問題」

### (中国を研究する社会学者の前途問題)<sup>(4)</sup>

コントが「社会学」ということばをはじめてつかってから、いままで百年余りに過ぎない。この学問は西洋から中国に紹介されてからわずか三十年余りの歴史しかない。したがって、社会学は社会科学のなかの年下の弟とみなされるだろう。その発展の歴史は短いけれども、その重要性はかえって、

ひととひとの間の関係を研究する科学であるので、その他の社会科学に劣らない。ひととひとの間の関係の調整は人類社会の第一の要であり、関係の調整がよければ社会は安定し、関係の調整がまだなされていないならば社会は不安定である。例をあげれば、現在の国民党と共産党の問題は一つの社会学関係のアンバランスの例である。以上は、社会学の一般的な重要性を説明したが、中国の社会の社会学のこととなると、なおまた特別な重要性がある。ここで二つの点に言えば、第一に中国は悠久の歴史をもつ国家であり、中国社会は早急に研究で掘り起こされることをまつ、豊富な材料が蓄積している。この責務は社会学者が担わなければならない。つぎに、中国は天災や人災が原因で、社会問題が非常に多い、世界各国で第一ということができよう。この種の問題を解決しようとするれば、必ず社会学の観点と方法を利用しなければならない。第二に中国社会の進歩を促さなければならない。研究以外にも、まだ多くの現場で処理が待たれる差し迫った改良の仕事があり、これもまた社会学者が指導する必要がある。これらのいくつかの面から、われわれは社会学が中国でいかに重要であり、きわめて拡大強化が待たれているかを知ることができる。しかし、目下わが国の社会学には少なくない困難があるので、われわれは必ずそれを取り除く努力をしなければならない。



龍冠海（1906 - 1983）

これらの困難は大きく二つの種類に分けて述べることができる。

第一の種類は一般のひとの社会学に対する誤解である。ある人びとは社会学を交際学と誤って試している。日本語の最初の訳語がこの交際学である。わが国では現在も多くのひとが社会学を学ぶことは交際を学ぶことだと思っている。社会のなかでの活動で、出しゃばりや、交際しにくいひととは社会学を学ぶべきではない。実際は、社会学の内容というのはこのようなものなのか！。社会学の観点はさらにどうしてこのように皮相であるのか！。社会学は一つの科学であり、社会学者は一人の学者である。かれは冷静な頭脳で社会の状態を観察し、研究しなければならないが、社会交際の俳優になるとは限らない。事実上、多くの有名な社会学者はすべてもっとも付き合い下手である。またある人たちは社会学を社会主義と誤って試している。社会学を説明することは社会主義を提唱し、共産主義を宣揚し、革命を

宣伝することであると思っている。その実は、社会主義ないし社会思想であるが、社会思想はただ社会学のなかの一つの課程に過ぎず。社会主義はすなわちあるひとの社会制度に対する主張であるが、社会学は客観的に社会現象を研究する科学である。両者の性質上で非常にはっきりした隔りがある。また、あるひとは、社会学は社会改良であると誤認している。これは社会学の範囲をあまりに狭くみ過ぎていて、同時にまた社会学の学術性を軽視している。社会学のなかの応用面はむしろ社会改良の仕事に関係しなければならないが、しかし社会学の基礎はすべて学問上の原理や理論のうえに立っている。なおある一部のひとは、社会学は非科学的であるとさえ攻撃するが、これは科学の意味を理解しないまちがった見解である。社会学はその独立した研究対象および特殊な研究方法をもち、その他の科学と互いに優劣がない。決して攻撃者がいうように内容が空洞で、方法が見当をつけようがないということはない。およそ新興の学問というものは、いつも非難や妨害を受けやすく、これは歴史上非常に多くの例がある。天文学が成立した当初、イタリアのガリレオは地球が動いていることを証明したが、その地動説は教会に許されなかったし、また公衆の面前で自己否定を強制された。かれは否定を強制されたけれども、しかしその後依然として「それでも地球は動いている」といった。われら社会学を研究している者は、このことを堅持する精神をもたねばならない。他のひとがなにをいおうと、社会学はやはり一つの科学であることをわれわれは知っている。第二の困難は社会学を研究す

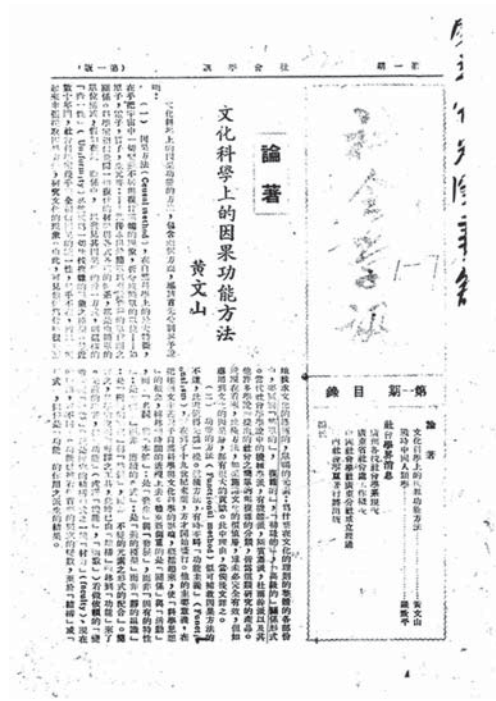
るひとの前途が制限を受けることである。この点は研究面および実際の仕事からいうことができる。研究面で最大の困難は経済問題である。経済問題はもとより中国人が研究を行なう時の一般的な困難であるが、しかし社会学の研究は非常に多くの実地考察を行なわなければならない、比較的多くの経費がなければ行なうことができない。しかし、現在のわれわれの政府は特別支出金を支出して、社会学者の研究活動に提供することもないし、裕福な同胞も助け合うことに理解がない。そのうえ、社会学を研究するひとは自らの生活もまたたいへんだと感じているので、社会学の研究は経済面でいっそうひと一倍困難だと感じる。次は技術の問題である。社会学の研究対象は、自然科学が物を研究対象とするように単純なものではない、したがって用いる方法および技術も異なる。多くの技術は本を引き写して応用してよりどころとすることはできず、実地研究の経験のなかからえることが必要となる。わが国の社会学の研究者の大半は技術上の訓練が乏しいので、それゆえ研究活動の成果に影響を及ぼしている。最後は応用の問題である。たとえ経済問題を克服し、技術問題を解決し、いくつかの研究活動の成果を獲得できたとしても、しかしながらこれらの結果はどのように応用するのか？。現在の中国ではどちらかといえば困難が幾重にもある。以上は、研究に従事する面での障害であり、次は実際の活動に参加する困難に触れたい。政治的な影響は実際の活動に参加する外的な困難である。政府は社会学者をまだ最大限に活用できていない、たとえば中央政府の社会部の数百人の職員のうち、社会学を修めたひとは非常に少数である。省の社会処、県市の社会局あるいは社会科に至ってはほとんど煙塵のひとがさまざまな業務を処理している、その他の付属機関もまたこのようである。この状況の大半は党派の関係および政治的背景からつくりだされたものである。この他にもまた内在的な困難がある。すなわち、社会学の研究者のトレーニングが不足している。一般的に社会学者の社会学それ自体に対する研究は多くはまだ深く掘り下げられておらず、すぐれた学識の基礎と技術訓練が欠けている。それゆえ、仕事上、非常にすばらしい成果があらわれていないし、かつ就業の困難を引き起こしている。

われわれはすでにうえて指摘した幾重にも重なりあった困難を知っており、直ちに積極的に方法を講じてこれらの困難を克服すべきである。困難を克服する方法は四つの点から説明することができる。第一は団結を強めることである。中国は、現在社会学者にまとまりがなく力がないことは包み隠すことができない事実である。たとえば、中国社会学社およびその各地の支部はすべて名前だけの会員がおり、実際には団結作用が生まれていない。大学社会学部の学会もなんらかの成果をだしているのを見ることはめったにない。これは全部団結に意を注がない結果である。英語のことわざで「団結は力なり」(Union is strength.) というが、われわれの座右の銘とすべきである。われわれの団結の目標は互いに励まし合い、かつまた社会学の真髄を紹介することにある。もって、一般のひとの誤った観念を是正するのであって、決して権力争いをするのではない。第二はトレーニングを強めることである。これは内在的な困難を克服する自己修養であり、たとえ観点、方法、知識、技術、人格およびいかなる面でも、すべての面において完全なトレーニングと修養があるべきである。第三は実地研究を重視することである。社会学を研究することは空想的でありえないし、また社会状況を実地研究しなければならない、その後研究の成果を公表して、関係方面に採用してもらい、かれらに社会学の貢献のあるところを知らしめ、これによって一般のひとの社会学に対する誤解を正す。10数年前、アメリカのフーバー大統領はアメリカの社会状況を調査することが必要と考え、そこで社会研究委員会を組織した。そのなかの専門家たちの大半はすべて社会学者である。これはアメリカの社会学者がふだん実地研究に注意を払って手に入れたところの信任である。第四は、実際の仕事に参加することである。行政業務の面では、われわれは方法を講じて政府機関に自ら進出しなければならない、政府の招集を待ってはいけぬ。たとえば、社会部および各省の社会処と各県市の社会局あるいは社会科、およびそれらの付属機関はその機構のなかに相当数の学生が働くようになれば、中国の社会行政もあるいは少しうまくいくかもしれないし、社会問題ももっと少なくなるかもしれない。社会福祉の仕事の面では、われわれも方法を講じて積極的に参加しなければならない。たとえば、養老院、孤児

院、病院、社会福祉部、および郷村の社会福祉などの仕事はすべて社会学を研究するひとが参加しなければならぬ、またその指導の責任を負わなければならない。われわれはもし以上のもろもろの点を実践することができるならば、われわれの困難が容易に克服できるようになり、われわれの前途も問題がなくなる。ことの成否はひとのやり方次第であるとは、このことをいう。

龍冠海（1906-1983）は、龍冠海（1906-1983）は現在の海南省に生まれ、幼少時にマレーシアに行き、華僑小学校を卒業し、その後シンガポールの中学に移り、その後北京の清華学堂のアメリカ留学準備クラスに入学し、6年後にアメリカに留学した。アメリカではスタンフォード大学、続いてサウスカリフォルニア大学大学院に進み、博士の学位を獲得した（学位論文「中国社会思想的演変」）。中国への帰国後は、金陵女子学院で教職に就いた。1949年、国民党政府の台湾への移動に伴って台湾に移り台湾大学で教職に就く。かつて故励天予（元華東師範大学教授）と奥様は筆者に「龍冠海が台湾に行ったことは後に知った、かれはその当時、独身であったから台湾に行くことができた」と語ってくれたことがある。龍冠海の甥の仲維暢は、1994年以後なつてはじめて、龍が台湾に移ったこと、台湾で中国社会学社を復活させたこと、『中国社会学刊』を創刊したこと、台湾大学社会学部を1960年に創設したこと、生涯未婚であったこと、1983年に亡くなったこと、その後台湾大学社会学部が龍の名前を付けた奨学金制度を創設したことを、知ったという<sup>(5)</sup>。また、彭秀良は、1949年当時、社会学者で台湾に移動したのはただ一人龍冠海だけであったと述べている<sup>(6)</sup>。また、後に楊懋春も1958年に、台湾に定住した<sup>(7)</sup>。

龍冠海は1960年台湾大学に社会学部が創設された時、最初の学部長になった。または、台湾の中国社会学社（1930年上海で成立、1951年「台湾」で再興、1995年台湾社会学会と改称）の理事長を長年務めた。かれの主要な著作には『社会学』（1966）、『社会思想史』（1971）、『社会学与社会問題論争』（1964）、『社会学与社会意識』（1974）、『都市社会学的理論と応用』（1972）、『社会思想家小伝』（1976）、『社会研究法』（1969）、『社会調査与社会工作』（1982）、『中国人口』（1955）、西洋社会思想史（共著）（1987）、『雲五社会科学大辞典・第一冊・社会学』（主編）（1971）など約45冊がある（調査報告、編著を含む。出典は台湾大学図書館資源探索服務ほか）。



『社会学訊』（第一期・創刊号）  
1946年5月20日，中国社会学社広東分社。

### 3. 孫本文、1947、中国社会学者今後努力方向之商榷 (中国社会学者の今後の努力方向についての議論)<sup>(8)</sup>

社会学は一つの科学であるが、もともと中国固有のものではない。中国に輸入されてからまだ五十年も経っていない。輸入の初期は、進歩が緩慢であり、社会学が比較的発達してきた時期は二十数年を超えてはいないだろう。しかし、この短時間のなかで、社会学はすでに相当な進歩があった。いままで、全国で社会学を学ぶ者はおよそ千人余りであり、著名な大学で社会学部の設置数は十八校に達し、出版された著書と訳書は六百冊以上である。しかしながら、欧米各国をよくみれば、実際にはるかに落後している。どのようにしてこのすでにある基礎を育成し、成長、発達を加速させるか、わが国の社会学者が仕事を分担しながら、協力し、ともに努力する必要がある。ここに今後わが社会学界が努力すべき方向について、同人と議論したい。

第一に、中国の理論社会学の確立。今後、社会学者は社会学の中国化の確立に努力しなければならない。その重要な活動には三つある。

一、中国固有の社会史の資料を整理すること。わが国の古い書籍のなかにはきわめて豊富な社会学の資料がある。それらで研究者に役立つものは五つである。

(一) 社会学説に関するもの。およそ昔のひとの社会生活あるいは社会問題についてのさまざまな思想はすべて収集と整理をして、時代順に、系統性をもった中国の社会思想史を編纂しなければならない。



孫本文（1892 - 1979）

（二）社会理想に関するもの。古今の賢哲が発表した社会組織および社会生活についての理想とプランも、また収集と整理をして、中国の社会理想史を編纂しなければならない。

（三）社会制度に関するもの。歴代の社会制度の性質、機能の状況と変化ならびにそれらの相互間の関連はさまざまな社会制度史を編纂するために、すべて分析しなければならない。

（四）社会運動に関するもの。歴代の社会運動の性質、起源、範囲およびその社会に与えた影響などは社会運動史を編纂するために、すべて分析と整理をすべきである。

（五）一般の社会的行為に関するもの。歴代の偉人・哲人が発表した立派な言行は、きわめて豊富であるので、社会学あるいは社会心理学の参考と引証に十分に提供できる。それぞれ収集を行なって、社会資料集を編纂して、利用に供すべきである。

二、中国社会の特性を実地に研究すること。歴史的資料を整理し、わが国の社会的特性の研究に供する以外に、なお多方面から現実の社会に対して詳細で精密な調査と研究を行なわねばならないし、それによってわが国の社会的本質を徹底的に調べなければならない。したがって、今後各地の重要地域に対して、計画的に都市と農村の調査を行ない、各種の社会調査研究報告を編纂し、各方面の参考に供さなければならない。

三、社会学の基本図書を系統的に編纂すること。わが国の社会学はすでに四十年余りの歴史があるが、社会学理論と応用方面に関する比較的充実し、かつ完全な書物はまだ多くない。しかも、まだ大学のテキスト用に供するものがない分野もある。たとえば、西洋社会思想史、中国社会思想史、近代社会学理論、中国社会発展史、社会制度、民族学、都市社会学、社会学研究方法、社会行政、社会政策、社会立法、近代社会運動などの部門は、少数の訳書を除いて、まだわが国のひとが著した適当な参考図書はない。したがって、基本図書を急いで編纂する必要がある。

以上の三つの方面の活動から、われわれはわが国固有の社会的資料を十分に収集ならびに整理でき、さらに欧米の社会学者の綿密で行き届いた理論に基づいて、完全に中国化した社会学体系を打ちたてることを願っている。

第二に、中国の応用社会学の確立。理論社会学の研究以外に、同時に直ちに中国の国情に適合した応用社会学の建設に従事しなければならない。それらの重要な活動には三つがある。

一、中国の社会問題を詳細に研究すること。これまでのわが国の社会学の文献のなかでは、社会問題の類のものが最多である。しかしこれらの書籍の大部分は西洋の社会問題を検討しており、そのなかでわが国の社会問題を専門に論じているものはきわめて少ない。今後全国の社会学者は、わが国の社会問題の特質および解決可能な道筋を徹底的に理解するために、それぞれ自分の持ち場で、それぞれの比較的小さな問題について詳細な研究を行なうべきである。

二、中国の社会事業と社会行政を早急に討議すること。わが国の社会学者は従来社会事業と社会行政の研究を重視しなかったことは否定を要しない。社会部が成立してからはじめて一般の社会学者の注意を引いた。今後、一部の社会学者はもっぱらこの方面で努力して、それによってわが国の社会事業と社会行政の実際状況およびその発展可能な道筋を研究すべきである。

三、中国の社会建設のプランを着実に研究すること。今後、全国の社会学者は上述した社会問題、社会事業と社会行政に関する材料に基づいて、社会組織、社会福祉、社会サービスおよび社会運動の各方面から、当面および今後の全国的なニーズを詳細に検討し、さまざまな社会改革のプランを周



到かつ慎重に立案し、それによって政府の参考に供さねばならない。

以上述べてきた各方面の努力から、今後社会学者は社会学理論とわが国の社会的事実に基づいて、中国の社会的ニーズに適合した応用社会学を打ちたて、それによって国家と民族の向上・発展を促かさねばならない。

第三に、社会学の人材の養成。わが国の社会学者の大多数は全国の各大学の社会学部に集中しており、ごく少数が中央および各省や市の行政機関に分散している。近年、大学のカリキュラムが増え、社会事業が発展したことによって、人材がきわめて不足する心配がある。今後は志のある若い社会学者を海外へ派遣してさらに勉強を奨励しなければならない、それと同時に国内の各大学のなかの人材と設備が比較的充実した社会学部および社会学研究所で、青年学者を育成し、それぞれの専門につうずるように、その長所を伸ばし、それによって全国の切迫した必要に応えなければならない。これができれば、中国の社会学の前途は、立ちどころに限りない希望がある。

孫本文について、韓明謨は「かれは(孫本文)は長期にわたり大学のなかで社会学の教育と研究に携わり、わが国の大学の社会学界のなかでもっとも影響をもった人物の一人である。…孫本文はわが国の社会学者のなかで、もっとも多くの著作をもった学者ということができ。…論文を除いても、本とした出版した社会学書だけで10冊余りある。そのうえ、豊かにして精確で、質朴簡素で、このベテラン社会学者の基礎の奥深さ、かれの倦まずたゆまない、粘り強い探求心をみることができる」<sup>(9)</sup>と記している。また、A. インケルスは中国に共産党政権が生まれる以前、孫本文が卓越した社会学の著作を発表したこと、および共産党政権成立後の孫本文の状況を記している<sup>(10)</sup>。孫本文について、筆者はすでに2、3編の稿があるので<sup>(11)</sup>、ここではかれが1948年までに著したものをかれの没後33年に編まれた著作集から次にあげておきたい<sup>(12)</sup>。

第一卷『社会学原理』(上)(1944年増訂版)、第二卷『社会学原理』(下)(同上)、附卷『社会学原理』(第1、2卷合訂版、1935年初版)、第三卷『社会心理学』(上)(1946年初版)、第四卷『社会心理学』(下)(同上)、第五卷『現代中国社会問題』(1) 家族問題(1942年)、第六卷『現代中国社会問題』(2) 人口問題(1943年)、第七卷『現代中国社会問題』(3) 農村問題(1943年)、第八卷『現代中国社会問題』(4) 労資問題(1943年)、第九卷『社会学上之文化論』(1927年)、第十卷『社会思想』(1945年)、第十一卷『近代社会学発展史』(1947年)、第十二卷『当代中国社会学』(1948年)、第十三卷『社会学綱要』(1928年)、第十四卷『人口論綱要』(1928年)、第十五卷『中国社会問題簡編』(1939年)、第十六卷論文集“社会学体系及其流派”、第十七卷論文集“中国社会的特点和问题”、第十八卷(外編)『社会学大綱』(上)(1931年)、第十九卷(外編)『社会学大綱』(下)(1931年)、第二十卷(外編)『現代社会科学趨勢』(1948年)。

#### 4. 朱約庵・呉百思・毛起鷄・陳定閔、1948、「中国社会学の過去と未来」 （中国社会学の過去と未来）<sup>(13)</sup>

##### （一）二十年来の中国社会学の成果

社会学は中国ですでに五十有余年の歴史があるが、この短い五十年余りのなかで、近代のさまざまな主要な理論がもたらされたばかりでなく、また社会学の中国化の基礎も固めたし、理論的探究のみならず、また実地研究もある。きわめて価値のある理論体系だけでなく、また実際の社会建設にまで応用された。社会学の人材と社会学課程はすでに日に日に増加し、きわめて重要な学問の主流になった。われわれのこれまでの成果はひとを深く懐かしませてやまないし、未来の展望にさらに無限の希望を託す。まず最近の二十数年来の成果について、その概略を次のとおり略述する。

##### （1）西洋の学説の紹介

嚴復がスペンサーの *The Study of Sociology* を訳してから、西洋の社会学説が順次絶え間なく中国に紹介された。最近二十年以内に、西洋の社会学説は日に日に多くなるばかりでなく、また次第にシムテム化と専門化している。この方面でもっとも貢献しているのは孫本文教授、陳達教授、呉景超教授、呉沢霖教授、潘光旦教授、呉文藻教授、応成一教授、許仕廉教授、黃文山教授、胡鑑民教授、朱亦松教授らである。その他の社会学界のなかのそれぞれの学者も西洋の社会学説に対して大きな努力と貢献をしないひとはない。中国社会学が光栄な歴史をもつことができた理由は、それぞれの努力した学者の紹介の功がきわめて大きい。

##### （2）中国社会学の建設

中国の社会学は西洋の社会学説を系統的に紹介しているのみならず、また中国の学説と中国の実際の社会現象を融合して総合的に一組の「中国の社会学」を打ちたてた。孫本文教授の社会学原理、社会心理学などが実際にもっともよい具体例である。抗戦中、社会学者の大半は西南部の諸省に集まり、中国社会と民族の研究に携わって、社会学理論の中国化に力を注ぐことがすでに一般的な現象になった。それゆえ、中国の社会学がこの二十年で貢献できた理由は、うえの点にあり、われわれがすこぶる喜びとするところである。

##### （3）実際の社会についての調査と研究

実際社会の調査は民国初期にすでに次第にはじまっていた、民国十六、七年以後には、この実地研究の気風がまた一般的になった。この方面に努力した学者は孫本文教授、言心哲教授、李景漢教授、費孝通教授らであり、すべて価値のある貢献をなした。孫氏が抗戦前に指導した南京や上海の社会調査、抗戦中に指導した重慶の社会調査および最近指導した南京のコミュニティ研究はすべて豊富な学術上の価値をもつ。言氏が指導した南京のいくつかの調査、李氏が行なった定県の社会調査も実際に即した研究であり、費氏の農村調査もまた重視されている。その他は、この方面で行なわれた実地研究はいずれも没頭して励まれたものであり、中国の社会現象の真理をみつけることに努力した。中国社会学が確立できた理由は、社会学者の一人一人が実際に即した調査研究をしたことと関係がある。

##### （4）社会学の人材の養成

中国の大学のなかで社会学部を設立したのは、民国二年の上海の滬江大学にはじまり、民国五年には北京大学はすでに社会学課程が設置されていた。民国十九年までに、各大学で社会学部を設置したのはすでに十一校、歴史学部といっしょのところは二校、政治学といっしょのところは二校、人類学といっしょのところは一校の合計十六校がある。これはここ二十年来の中国社会学の人材輩出の主要因である。たとえば、中央大学、清華大学、中山大学、復旦大学、金陵大学、燕京大学、大夏大学、東呉大学、滬江大学、嶺南大学、金陵女子文理学院などはすべてながい歴史がある。抗戦中に、また雲南大学、社会教育学院という若干の新しい新鋭部隊が加わったし、その他の社会学部がないところ

も、ほとんどの法文学部にはすべて社会学の課程がある。ひいては一般の訓練班さえもすべて社会学課程を設けている。したがって、社会学の専門の人材も日を追って増している。人材のなかで、専門的な研究をする人材だけでなく、また若干の実際に社会行政および社会事業に携わる人材もある。

#### (5) 実際の応用の普及

中国社会学の実際の応用は、社会学が中国に紹介されてからまもなく開始したが、しかし一般的に用いられたのは最近十余年にもっとも多くなった。応用の方面では、一つは社会行政で、一つは社会事業である。社会行政の方面では、社会部の成立後から、社会学の応用は非常に大きな助けを手にした。社会行政は谷正綱氏の指導のもとで、全国の学者を集めて、社会学の原理と原則を応用し、社会問題の解決に従事し、社会建設の推進に携わった。また一方では、社会政策、社会立法の策定に従事した。憲法のなかへ社会安全の章を組み入れたことは、この面での努力の具体的なあらわれといえるべきである。この二、三十年來、中国の社会事業もまたよどみなくはかどっている。たとえば、児童福祉、病院社会活動などはすべて相当成功している。しかも、社会事業、社会行政の人材は、各大学の社会学部が絶え間なく努力して訓練しているので、また日一日と増えている。

要するに、中国社会学の過去の成果は紹介から創造へ、理論から実際へ、研究から応用へと至り、中国の現状と西洋の現状を結び付け、理論と実際に通曉し、理論と実際を一つにすることができた。これは確実にきわめて得難い成果である。

#### (二) 中国社会学の展望

中国社会学は、全国の社会学者の努力によって、はじめて今日の成果が可能になった。この種々の成果はまさに日が昇るようであるけれども、なおわれわれはさらなる努力をする必要がある。わずかに管見ながら、愚見をささげたい。

##### (1) 各大学があまねく社会学部を設置することを希望する

大学の社会学部の設置はいままで数十校のみに過ぎず、国内の若干の著名な大学はこの学部が設立されていない。社会学学説の研究と実際の社会事業、社会行政の人材はますます一刻も猶予できない。毎年、社会学部の卒業生はすでに需要に応じきれなくなっている、したがって国内のすべての大学は実際の需要に応えるために、あまねく学部を設立すべきである。

##### (2) 各大学は社会学研究所および実験区を設立すべきある

国内の社会学部をもつ大学で、社会学研究所を設置しているのはわずかに中央大学、清華大学、金陵大学、燕京大学の四校だけであり、この上級および専門の人材の訓練はとりわけ不足している感がある。われわれはおよそ社会学部をもつ大学はすべて、努力してなんらかの方法を講じて、社会学研究所を創立して、高級人材を育てるべきだと思う。国内の社会学者の大部分は教育に携わっている、われわれは教育以外に、常に実地調査と研究を行ないやすくしたい。したがって、各大学の社会学部はみな実験区をもって、学者の研究と学生の実習に供する。けれども、経費の制限で、この計画をまだ十分実施していないことは、これは実に中国社会学界の一つの遺憾なことである。したがって、われわれは政府あるいは地方団体、社会団体ができる限り各大学の社会学部が実験区を設立することを補助し、もって実際の問題を研究する用途とすることを望む。

##### (3) 政府は社会学の研究と応用を提唱する努力をするべきである

十年來、社会事業と社会行政は積極的に展開しているし、政府でも社会学の研究と応用にも非常に注意が及んでいる。しかし、いまだに政府の公費留学生の試験のなかにまだ社会学がない。本中国社会学社がかつて教育部に留学試験のなかに社会学を必ず入れるよう建議した。志のある青年が外国の社会学界と知識を交換し、各国の新学説を吸収することが、間もなく実現できるように切に望む。

社会行政部門はすでに少なからず社会学のスペシャリストを集めているが、しかし地方の社会行政部門、社会行政の業務部門は、まだスペシャリストを広く集めてられていない。ゆえに、社会学のスペシャリストはまだ自分の才能を發揮できないひともいる。ゆえに、われわれが望むことは人材の養成に協力することだけでなく、新しい行政を行なって新しい人材を使うという原則で広く社会学の人

材を集めて、実力のない者が席を占めることがないようにすることである。

(4) 中国社会学体系の完成

中国の社会学理論はすでに優秀な基礎をしっかりと固めた。学者で中国の社会現象の原理と原則を探し求めることに没頭して励まないものはない。われわれは国内の学者にさらに一歩進んで仕事を分担しながら協力し、中国社会学の体系を完成させて、また深く広く深化させるように希望する。これは、各位といっしょに励むことを願う。

うえの論攷の共同執筆者朱約庵、呉百思、毛起鷄、陳定閔の4名はいずれも、『中国大百科全書（社会学）』（1991、中国大百科全書出版社）には記載がない（龍冠海、孫本文の二人は記載がある）。したがって、ここでは『社会学刊』（1929年は東南社会学会、その後1930年からは中国社会学社の公刊）および孫本文著『当代中国社会学』（1948、勝利出版）などからかれらについて紹介したい。

朱約庵（勤務校：中央大学 アメリカ留学経験、孫本文、『当代中国社会学』、p.319）。  
「児童福利與犯罪預金防」（『社会建設』（復刊）、第1巻、第3期、1948年7月、社会建設月刊社、pp.11-15）。

呉百思（勤務校：中央大学 アメリカ留学経験、孫本文、同上、p.320）。  
「都市特性比較研究法」（『社会建設』（復刊）、第1巻、第2期、1948年6月、社会建設月刊社、pp.11-13）。

毛起鷄（勤務校：中央大学 留学経験なし、孫本文、同上、p.319）。  
「編製工資指数之理論上與實際上的問題」（『社会学刊』、第1巻、第3期、1930年5月、東南社会学会、pp.1-17）。

「上海之劳工－根拠上海特別市社会局劳工統計材料而作－」（『社会学刊』、第1巻、第4期、1930年9月、東南社会学会、pp.1-52）。

「1929年上海工廠工人實際收入額統計」（『社会学刊』、第2巻、第1期、1930年10月、中国社会学社、pp.1-20）。

「業務分類之原理及其方法」（『社会学刊』、第2巻、第3期、193 \*年 \*月、中国社会学社、pp.1-33）。（\*は原資料に奥付が欠落していることを示す。以下同じ）

「近四年上海労資争議案件彙編」（『社会学刊』、第3巻、第1期、193 \*年 \*月、中国社会学社、pp.1-65）。

「編製劳工統計之國際的準則」（『社会学刊』、第3巻、第4期、1933年4月、中国社会学社、pp.1-34）。

書評「楊西孟の上海工人生活程度の一個研究」（『社会学刊』、第4巻、第2期、193 \*年 \*月、中国社会学社、pp.3-6）。

「一個亟待培養の觀念－社会福利」（早急に進展を要する觀念－社会福利）（『社会建設』、第1巻、第1期、1944年7月、社会建設月刊社、pp.1-3）。





にわたり、孫本文は1949年以後の新中国で、自らのブルジョア思想を自己批判し、「批判我旧著『社会学原理』の資産階級思想」<sup>(16)</sup>(わたしの旧著『社会学原理』のブルジョア思想を批判する)という論文さえ書いている<sup>(17)</sup>。ここで紹介した三つの論攷にみられる考え方が、新中国成立前の当時の学界、大学で圧倒的優位であったのである。

〔注〕

- (1) ここでは龍冠海が1947年当時の国民党と共産党の関係、社会主義、共産主義、革命と社会学との関係について、また孫本文はここでは触れていないがかつて自著『社会学原理』(1935)のなかで史的唯物論、社会主義と社会学とを峻別する必要を論じている。マルクスの名前およびその学説はすでにティモシー・リチャードによって中国に紹介されていたし、マルクス主義、史的唯物論、マルクス主義社会学を志向したり、主張する学派があったことは事実であるが、学界、大学で圧倒的多数であり、かつ主流とみなされたのはブルジョア社会学である。これらについては、韓明諱著(1987)・星明訳(2005)『中国社会学史』(行路社)、拙稿、2017、「中国におけるマルクス主義社会学の受容と展開」、『社会学部論集』、第64号、佛教大学社会学部、pp.1-23を参照されたし。ただし、龍冠海も孫本文も社会学それ自体が廃止される運命は予見していない。
- (2) 中国の社会学の発展の時代区分については、星明、1995、『中国と台湾の社会学史』、行路社、pp.3-10を参照されたし。
- (3) 閻明、2004、『一門学科与一個時代—社会学在中国—』、清華大学出版社、p.39。ここでの閻明の記述は、次の四つの記事ないし論文からの紹介である。「滬江大学全部被毀、圖書儀器均成灰燼」(『中央日報』所載、1937年8月16日)。冰心、1983、「丟不掉的珍寶」(『冰心選集』所載、第2卷、成都、四川人民出版社、p.154。陳達、1991、『浪迹十年』、台北、文海出版社、p.452。李鐘湘、「西南連大始末記」、『過去的学校』、p.263。
- (4) 龍冠海、1947、「中国研究社会学者的出路問題」(中国を研究する社会学者の前途問題)、『社会学訊』、第4期、中国社会学社広東分社、pp.1-2。
- (5) 仲維暢、「師友情：回憶龍冠海伯伯」(<http://www.tsinghua.org.cn/xxfb/xxfbAction.do?ms=readPDF&docId=11233568>)。当時の中台関係が龍冠海に与えた影響について、仲維暢は「龍冠海は海峡兩岸交流のその日待つことはなかった、ひとの命運というものはいつも歴史の潮流に左右されるものである」とも記している。
- (6) 彭秀良、2010、守望与开新：近代中国的社会工作、河北教育出版社。ただし、ここでは彭秀良の「社会主義中国不存在社会問題」([http://www.360doc.com/content/15/0415/17/1417717\\_463428925.shtml](http://www.360doc.com/content/15/0415/17/1417717_463428925.shtml))から引用した。彭秀良の主張は、社会主義の中国には社会問題は存在しないというのではなく、1952年当時、大学の社会学部や社会学科が廃止された理由は「共産党の指導下の社会主義の中国には社会問題は存在しないと考えた人たちがいたからである」と述べている。
- (7) 北京大学社会学系史学人伝略楊懋春、北京大学社会学系(<http://www.shehui.pku.edu.cn/second/index.aspx?nodeid=20&page=contentpage&contentid=1532>)
- (8) 孫本文、1947、「中国社会学者今後努力方向之商榷」(中国社会学者の今後の努力方向についての議論)、『中国社会学訊』、第5期、pp.1-2。
- (9) 韓明諱著・星明訳、1987(訳、2005)、『中国社会学史』、行路社、p.148。
- (10) アレックス・インケルス著、辻村明訳、1964(訳、1967)、『社会学とは何か』、至誠堂、pp.204-205。
- (11) 星明、2015、「著名社会学者孫本文の二つの社会学観の通底性について」、『社会学部論集』(佛教大

- 学), 第 61 号, pp.1-18。孫本文著・星明訳, 1949 (訳, 2016), *Sociology in China, Social Forces*, vol.27,no.3, pp.247-251, 「中国の社会学」, 『社会学部論集』(佛教大学), 第 62 号, pp.141-156。星明, 2004, 「新中国成立前後の中国社会学者の状況-孫本文を中心に-」, 『社会学部論集』(佛教大学), 第 38 号, pp.115-124。
- (12) 孫本文, 2012, 『孫本文文集』(第 10 卷), 社会科学文献出版社, pp.175-176。
- (13) 朱約庵・呉百思・毛起鷄・陳定閔, 1948, 「中国社会学の過去と未来」(中国社会学の過去と未来), 『中国社会学訊』, 第 8 期, 中国社会学社, pp.4-5。
- (14) この雑誌『社会建設』の創刊号の「発刊詞」には, 「抗戦の勝利が, 日一日と近づいている。建国事業を特に力を入れて進めなければならない。ただ建国事業は, 糸口が多く, 入り乱れている。全国の各分野の専門家, 学者の各方面からの研究と設計がなければ, 各事業を同時に円満に進めることができない。本刊の発行の狙いは, 全国の学術理論研究の豊富な社会学者および実際の経験の豊富な社会事業と社会行政の専門家を動員して, 共同で戦時および戦後の社会建設に関する各種の理論と実際問題を議論し研究し, 社会学理論と社会技術を実際に生かすため, 研究者それぞれが個人の立場から, 研究で得た収穫を発表することを期待する, これによって建国の偉業に対して, いささかの貢献をしたい。……(中略)……要するに, 本刊の使命は, 全国の社会学者と社会事業・社会行政の専門家を集めて, 社会建設の各理論と実際問題に関して共同で研究することであるが, しかし発刊早々で, 欠点も多くあるに違いない。なお全国の諸賢から十分な教を願うものである」と記されている。
- (15) 孫本文, 1935, 『社会学原理』, 商務印書館, pp.631-632。
- (16) 孫本文, 1958, 「批判我旧著『社会学原理』的資産階級思想」, 『哲学研究』, 第 6 期, 中国社会科学院哲学研究所, pp.41-49。
- (17) 孫本文の自伝, 著作本への書き込みなどについては星明, 2016, 前掲訳稿を, 孫の新中国成立の以前と以後の社会学観の基底については星明, 2015, 前掲論稿を, 参照されたし。

(ほし あきら 現代社会学科)

2018 年 4 月 26 日受理